

---

# 環境教育

— これからの環境教育 —

広谷博史（大阪教育大学）

---

## 1. 環境教育と理科教育

わが国の環境教育は、公害学習として始まったとされる。昭和43年には、学習指導要領でも「産業などによる公害から国民の健康と生活環境を守ることがきわめてたいせつであること（5年社会）」を理解することが定められた。このように当初は国民を公害から守るために原因を追及する学習ととらえられてきた環境教育であるが、現在では「環境の保全の重要性について関心を深めるようにする（5年社会）」と改訂されている。しかし、環境教育は必ずしも教室だけで行われるものではなく、学齢期前に肌感じた土の臭い、川で遊んだ爽快さなど、生活の中で気づき学ぶことも多い。五感を通じて自然を感じることも環境教育のひとつであると考えられる。

環境教育は特定の教科だけに依存するものではないものの、環境を理解するために必要な自然の基本原理は理科の中で扱われることが多い。環境教育の実施にあたっては、自然科学的な博学的知識、観察の仕方を身につけることが重要であろう。そのためにも、実験観察を中心に据えた理科教育の実践が望まれる。

## 2. 未来の環境教育

ここ十年ほどで最も大きく変わったことは、コンピュータとネットワークの普及であろう。情報技術が当たり前のものとなり、生活に入り込んだ結果、何がおきたのであろうか。また、今後はどうなっていくのであろうか。そのことの意味を環境教育という立場から考えてみたい。

今後到来する未来の社会では、人口が減少するとともに、年齢構成も今とはずいぶん異なる様相となるであろう。その結果、空き地の増加、外国からの労働力の増加など社会の様子もずいぶん変わってくると思われる。そのような社会を生き抜くためには、自然や地球を保全するだけにとどまらない人間教育と統合された環境教育が求められるようになる。自分たちの町の魅力を発見するために、環境と人間を知ることが目的とした環境教育を目指す必要があるであろう。